

## 第5回

資金収支計算書と  
事業活動計算書

MATSUMOTO Kazuya

松本和也

株式会社福祉総研 取締役 上席研究員

第2回では貸借対照表（B/S）と純資産の意味について、第4回では支払資金の重要性について解説しました。B/Sにおける純資産は総資産と総負債の差額で計算され、純資産は大きい方が望ましいのです。しかし純資産が多いだけでは必ずしも健全とは言えず、短期的な支払いに充てるための支払資金とのバランスも大切です。

B/Sに表現された額の中には、純資産と支払資金という大切なところ、言い換えると“いつも見て把握しておかなければならないところ”があるので、この2つの額はいつも気にして管理しておかなければなりません。管理しておくということは、増減が生じたらその事実を記録に留めておき、現在の額を常に把握しておくということです。

簡単な例で見てみましょう。

図1 支払前のB/S			
流動資産	10万円	流動負債	2万円
		固定負債	1,500万円
固定資産	2,000万円	純資産	508万円
支払後のB/S			
流動資産	9万円	流動負債	2万円
		固定負債	1,500万円
固定資産	2,000万円	純資産	507万円

図1のB/Sは、第4回で引用した例を用いて、少しだけ表示を変えたものです。網掛部分が支払資金の範囲で、支払資金残高は8万円（10万円と2万円の差額）です。このB/Sの状態から、1万円の電話代を現金で支払ったとします。現金は流動資産ですから、流動資産は9万円に減少します。固定資産、流動負債、固定負債には変動はありません。総資産は2,009万円に減少し、総負債の1,502万円との差額507万円が純資産です。このように、1万円の現金を支払うと、純資産は1万円減少します。

純資産は常に管理しておく必要があるため、純資産が減少したなら、その事実をどこかに記録しておく必要があります。これが「事業活動計算書」の役

割です。つまりB/Sに変動が生じ、それによって純資産が増減したら、その事実を事業活動計算書に記載して増減の様子を管理するのです。前述の例では、純資産が1万円減少したことを事業活動計算書に「通信運搬費1万円」と記録して表示します。

一方、常に管理しておくべきもう一つの大切なところ、すなわち支払資金は、支払前の8万円から支払後の7万円（9万円と2万円の差額）に、1万円減少しています。この支払資金の減少という事実を記録するのが「資金収支計算書」の役割で、前述の例では「通信運搬費支出1万円」と記録して表示します。

皆さんの中には、なぜ事業活動計算書と資金収支計算書という似たような書類を2つ作らなければならないのか、また両者の記載内容の違いは何なのか、不思議に思った方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

会社経営では、純資産が潤沢で損益計算書（社福会計の事業活動計算書）は黒字でも、資金が不足して短期的な支払いがままならず倒れてしまうことがあります。いわゆる「黒字倒産」です。保育所に例えるなら、豪華な園舎を無借金で建設したものの、手許のお金が不足して給料が払えない、といったような状態です。事業活動計算書では黒字を示していても、手許資金不足に陥る事態を避けるために、資金収支計算書が作成されます。

先日、「厚労省から、施設運営に支障が生じていると回答した施設が全体の1割を超えている、という調査研究結果が公表された」という報道がありました。恐らくこれらの中には、資金収支計算書における資金不足の状態にある施設が相当数含まれていることが想像されます。

短期的な資金を管理して資金不足を回避するには、資金収支計算書こそ重要なのです。

## &lt;まとめ&gt;

- ① 純資産と支払資金はどちらも重要であるため、常に管理する必要がある
- ② 純資産の増減の様子を記録して管理するのが「事業活動計算書」である
- ③ 支払資金の増減の様子を記録・管理するのが「資金収支計算書」である
- ④ 資金不足に陥らないようにするため、資金収支計算書の確認は大切である